

## 岡崎知子助教授を偲ぶ



## 略歴

- 大正 十年十月(年齢)  
 昭和十三年三月(16) 北海道小樽市に生まれる  
 小樽市高等女学校卒業  
 昭昭十四年三月(17) 右補習科終了  
 昭和十五年三月(18) 東京女子高等学國家政科修了  
 昭和二十八年四月(31) 大谷大学短期大学部へ入学  
 昭和三十年三月(33) 右卒業(法主賞を受ける)  
 同 四月(〃) 大谷大学文学部(国文科) 三回へ編入学  
 昭和三十二年三月(35) 右卒業(法主賞を受ける)  
 同 四月(〃) 大谷大学大学院修士課程へ入学(仏教文化専攻)  
 昭和三十四年三月(37) 右修了  
 同 四月(〃) 大谷大学大学院博士課程へ入学(仏教文化専攻)  
 昭和三十五年三月(38) 右退学  
 同 四月(〃) 大谷大学講師(常勤)を委嘱する  
 任大谷大学助教授  
 昭和三十九年四月(42) 命終。法名 常照院釈尼知信  
 昭和四十二年二月(45)

## 岡崎助教授の思い出

多屋 頼 俊

昨年十一月の末に、小樽の病院え見まいに行った時、岡崎さんわ

「どうかして、もう一度、研究室へ帰りたいんです……もう一度、教壇に立ちたいんです……でも、私は、ベットから下りることもできなくなりました……或わ、このベットの上で、最後の息を引きとるのかもしれない、と思っております……」

「山本先生からいただいた芭蕉俳句ノートを、読みにかかりましたけれど、同じところを、三度も五度も読みかえしましても、どうも十分に理解ができません……頭の力がすっかり衰えてしまったようで……」

と言つて泣かれたのであった。岡崎さんわ、昨年の正月に臥床せられたが、六月の末にわ、幸に一応、医師の手を離れるまで恢復せられ、八月十日すぎに小樽へ避暑のつもりで帰られた。その頃には、九月の二十日頃に上落して、十月初から教壇に立つつもりで、大層意気こんでおられたのであったが、九月の中頃から病気が再発して、もはや恢復の見込みがなかつたのであった。ただ病気の性質上、本当のことわ、本人に知らされていなかつた。し

かし、私わ、それでわ、だまし討ちにでもするようで、いかにも気の毒なように思われたので、恢復お期待するとゆうことわ、極めて困難なのだ、とゆうことを、遠まわしに言いふくめたいと思つて、はるばる訪ねて行つたのであるが、幸か不幸か、岡崎さんわ大体そのことお予感しておられたので、私わそれ以上に言う必要わなかつたのであった。

私より四日前に、岡崎さんの第一の親友である神戸のN夫人が小樽まで来訪せられたのであったが、N夫人わ、わざわざ訪ねて来たと言つてわ、或わショックお与えるかもしれないと考慮せられて、札幌の大学に急用があつて来たので、そのついでに立ち寄つたと言われたのであったが（このことは、私は京都を立つ前に聞いていた。私も別の理由をこしらえて訪ねたのであつた、岡崎さんわ、それに対して少しの疑念もはさまずに、「Nさんが、北大へ来られたついでに寄つて下さつて……」と言つて、大層喜んでおられた。それはそれでいいのだけれど、私は、ふと数年前に、A君B君らが岡崎さんを、かついだ事お思い出して（その頃、B君は腎を病んでいたのであるが、岡崎さんに「僕は、もう医業ではどうにもならなくなつたので、キャベツを二三十個も買つて来て、小さくききんで、三日三晩煮つめて、キャベツとゆうものにして、それを服用している」と言つたところ、岡崎さんは、それをマに受け「まあ、そんなに悪いの」と驚いた）、岡崎さんわ人を疑われない、すなおな人なのだな、善人だな、と思われて、今日の別れが今生の別れだと思ひながらも、そう暗い気持ちにもならないで、別れて来たのであった。

## 二

昨年の二月「国語と国文学」に発表せられた岡崎さんの論文「平安朝女性の物語」わ、学界の大先輩たちから賞讃せられた好論文であった。それわ、まことに忠実に資料を博捜し、想お練った力作であって、学問に対する執念と言おうか、この一文に命おかけたと言うてもいるような気迫の感ぜられるものであった。しかもそれわ、この論文だけでわなく、「撰関時代史の研究」に収められた「大齋院選子の研究」にしても、「仏教文学研究」に載っている「釈教歌考」にしても同じことである。岡崎さんわ「私わ晩学ですから」と口癖のように言うていたが、そのことばの裏に「(私わ、長生きわできませんから)」とゆう意味もふくまれていたような感がある。

岡崎さんわ、昭和二十八年に大谷大学短期大学部え入学せられたのであるが、その頃の短期大学部わ仏教科だけで、女子学生わ一人か二人しか居なかつた。入学願書お出される前に、文化時報社のI氏につれられて、私のところえ相談に來られたので、「ほとんど男の学生ばかりですが、いいですか」と言うると「なに、十八や九の坊っちゃんたちなぞ、何とも思いません」と答えられたことお今も記憶している。いま履歴書で調べてみると、岡崎さんわその時三十一歳であつたのである。それから短期大学お卒えて文学部三回に編入学し、文学部お卒えて大学院え入り、修士課程お終り、昭和三十五年三月に博士課程の一年お終了せられた。そして同年四月、大谷大学講師(常勤)になり、三十八年四月、助教に任ぜられて、今日に及ばれたのであつた。

岡崎さんわ、昭和十三年に小樽高等女学校お卒業し、次いで同校の補習科お終え、東京女子高等学園の家政科お終了せられたのわ十五年三月であつた、この頃から戦争がはげしくなつたのであるが、社会情勢の最も悪かつた頃に、三年余も臥床せられたと聞いた。そして、三十歳お過ぎてから大学え入られたのであつた。しかも気の毒なことに、大学院に居られた頃に狼瘡にかかられ、それが慢性化して、唇の裏や鼻腔に腫物ができて困つておられた。「これが内臓に移れば、治療ができないのです」と時々言うておられた。一つ一つの論文に、命がけで取り組まれたのわ、或わこのような難病お内に抱いておられたためであつたのかもしれないと思ふ。

最近、岡崎さんの下宿お引き払つて、蔵書の類お一応、大学の研究室え運び入れたが、「あの本お買いました」「この叢書おそろええました」と、目おかがやかせて報告しておられたのが、一つ一つ思ひ出される。それにもまして、いろいろの文獻から抜き出された数百枚、いや数千枚の資料カード、未完成の原稿お見ると、岡崎さんが病中に「ああ苦しい……いま死んでわこまる……いまわ死ねない……早くあの論文お書かなければ……」と、半わうわごとのように言うておられた、という事が思ひ出されて、形容することのできないものが胸にせまる。

## 三

昨年の秋以来、私わ幾度となく「岡崎さんわ、もうダメなのだ」と自身に言い聞かせて來たのであつたけれど、亡くなつてみると、突如として空洞でもできたように、茫然としてゐること

ある。私が岡崎さんの追憶お書く、これわ全く逆なことである。

(終)

著作論文目録

赤染衛門伝の論郭

「文学・語学」(昭和32・9)

和泉式部と性空上人

「文学・語学」(昭和34・9)

和泉式部の宗教的心情について

「大谷学報」(昭和43・12)

相模集と思女集

「大谷大学国文学会々報」(昭和36・12)

伊勢伝考(宮仕時代を中心に)

「大谷学報」(昭和37・3)

〃 (敦慶親王と伊勢)

〃 (晩年の伊勢)

积教歌考

「仏教文学研究」(昭和38・12)

大斎院選子の研究

「撰関時代史の研究」(昭和39・7)

枕草紙に見える藤原斉信

「古代文化」(昭和40・7)

平安朝女性の物語

「国語と国文学」(昭和41・2)

なお近く刊行せられる「平安朝女流作家の研究」(岡崎知子著、A5版三〇七頁)は、右記の諸論文を集めたものである。